The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞藤川隆男編『オーストラリアの歴史 ： 多文化社会の可能性を探る』 / 岡崎勝世著『世界史とヨーロッパ　ヘロドトスからウォーラーステインまで』 / 土岐健治著『はじめての死海写本』 / 周藤芳幸・澤田典子著『ギリシア遺跡事典』
Author(s)	米田, 誠; 竹中, 徹; 鷲田, 睦朗 他
Citation	パブリック・ヒストリー. 2005, 2, p. 154-156
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66429
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

藤川隆男編
『オーストラリアの歴史
── 多文化社会の可能性を探る ──』

有斐閣、2004 年 4 月刊、B6 判、278 頁、
2300 円＋税、ISBN4-641-12209-1

オーストラリアを知らない、という人はほとんどいないだろう。しかし、この国が日本と深く関わっていることを私たちが意識する機会は少ない。まして、歴史の教科書では語られることの少ないアボリジナルの歴史や、日本とオーストラリアの歴史的な関係についてはほとんど知られていないであろう。本書はオーストラリアの歴史を平易な文章で描きながら、それらに焦点をあてている概説書である。すべてを紹介することは出来ないが、ここでその一部を紹介したい。

本書は 20 章からなっており、冒頭の第 1 章「海を渡ったモンゴロイド」から第 3 章「抵抗の文化戦略」までは、アボリジナルの社会や彼らが現在抱えている問題について述べられている。第 13 章「女性の天国か、地獄か」では、女性史の研究成果に光があてられ、様々な女性の生活が描き出されている。また、第 15 章「アンビバレントな関係」では、近代の日本とオーストラリアの関係が、時代をおって書かれている。もちろん、アボリジナル・女性史・日豪関係史といったテーマはこれらの章だけにとどまらず、各章においても叙述され、本書の大きな特徴となっていると言えるだろう。

もう一つの本書の大きな特徴は、付属の CD-ROM である。その中にはオーストラリア辞典と年表が収められている。それらはオーストラリアを知るための基礎的な情報を提供してくれる。本書と合わせて活用できるであろう。

このように、本書はコンパクトにまとめられた概説書でありながら、先住民・ジェンダー・社会史などを主要なテーマに、日本ではあまり知られることのなかったオーストラリアの歴史を教えてくれる。オーストラリア研究を行う者には必携の書であるのはもちろんのこと、オーストラリアに関心を持つ一般の読者にも手にとってもらいたい 1 冊である。一読をおすすめしたい。

なお、この本の詳細については以下のウェブページから知ることができる。

オーストラリアの歴史（http://www.let.osaka-u.ac.jp/seiyousi/pub/ozhistory/top.html）

（米田　誠）

岡崎勝世著
『世界史とヨーロッパ
ヘロドトスから
ウォーラーステインまで』

講談社現代新書、2003 年 10 月刊、268 頁、
720 円＋税、ISBN4-061-49687-5

「現在」から「過去」への問いかけとそれに対する解答は、時代の流れとともに変化する。ゆえに「歴史は書きかえられる」といわれる。本書は、「世界史」とは何かという問いに答えるために、こうした「書きかえ」の歴史について記述したものである。

つぎに挙げる内容構成がしめすように、ヨーロッパにおける世界史記述を対象として、古代から近代までの変化を時代ごとに追っている。

第 1 章　ヨーロッパ古代の世界史記述
　──世界史記述の発生
第 2 章　ヨーロッパ中世のキリスト教的世界史記述
　──「普遍史」の時代
第 3 章　ヨーロッパ近世の世界史記述
　──普遍史の危機の時代
第 4 章　啓蒙主義の時代
　──文化史的世界史の形成と普遍史の崩壊
第 5 章　近代ヨーロッパの世界史記述
　──科学的世界史

さらにそれぞれの章は 2 つの節に分けられており、まず、各時代の歴史記述の基盤となった世界観および時間の観念についての記述がなされている。そして、それらに基づいて形づくられた各時代の歴史学および世界史像の特質を、主要な歴史家たちをとりあげつつ説明している。

ある時代、あるテーマ、ある歴史家の歴史観と歴史記述に、まとを絞って書かれた書物はこれまでにもあった。しかし本書のように、古代から近代にいたるまでの長い時間的範囲を扱ったものは、ほとんど無かったといってよいだろう。記述の時間的範囲を長くとることにより、それぞれの時代の特徴をよ

り明確にしめすことに成功している。

そして本書を読んだ者は、おのずと次の問いにいたることだろう。「それでは現代の歴史記述についてはどうだろうか」と。著者は第5章のおわりの部分に、著者自身の考えのアウトラインをしめしている。おそらく新書版という紙幅の制限もあって、この部分は簡潔であり、読者は物足りなく思うかもしれない。しかし本書が本当に訴えたいことは、この問いについて、本書をもとに読者自身が考えてみるということではないだろうか。そういった意味において本書は大変興味深い書であるといえる。

（竹中　徹）

土岐健治著『はじめての死海写本』

講談社現代新書、2003年11月刊、286頁、740円＋税、ISBN4-06-149693-X

本書は、筆者の見解によれば、我が国では、これまで空想的にしか取り扱われていなかった死海写本を、初めて学術的に紹介した著作である。

第1章では、「写本発見と公刊への数奇な道」が紹介されている。死海写本は、1946-47年ないし1938年に死海北西岸の丘陵地帯のクムランと呼ばれる地域で発見され、第1次中東戦争時の混乱を潜り抜け、1948年から1956年までに公刊された。初期の発見を踏まえて学術的に発掘された11の洞窟からも、約900の写本断片が発見されている。これらの写本は、第3次中東戦争などの紆余曲折を経て、遅れに遅れつつも、国際チームの手によってDiscoveries in the Judaean Desertとして公刊が進められている。この公刊の遅れや国際チームの秘密主義が様々な憶測を生む一因になったことが窺われる。第2章「死海写本の背景 ── ヘレニズム・ローマ時代のユダヤ史」では、まず、プトレマイオス朝、セレウコス朝の支配下で成立したハスモン朝による大祭司僭称の結果、前2世紀にはユダヤ民族が内部分裂していたことが説かれる。この状況の下、死海写本を残したクムラン宗団（著者はエッセネ派の中核と推定）が成立したとされる。前1世紀にローマの支配に入っても、ユダヤはローマに同化せず、2度のユダヤ戦争が勃発した。クムラン宗団の居住地も、第1次ユダヤ戦争時（66-70年）に破壊されたとされる。第3章では、以後の考察の前提として、前3世紀末から後1世紀中頃までに書かれたと推測されているクムラン写本から8点が取り上げられ、「写本には何が書かれているか」が説かれる。第4章では、終末論的二元論を特徴とする初期ユダヤ教黙示文学と、神の叡知を探るという意味での知恵文学との2つの側面を備えた「クムラン宗団の思想」が再構築される。体制（ハスモン朝）を糾弾するクムラン宗団は、敵対者を「闇の子ら」などと非難し、「光の子ら」である自分たちだけが旧約聖書の正しい解釈を啓示されていると自負する一方で、自分たちの罪業を自覚し、それを許し購う神に深く感謝するという神学を形成していた。この形成には、前2世紀後半に活躍したと推測される「義の教師」が大きく関与していた。また、暦法に対する神学的解釈の相違が、クムラン宗団が他派と対立した原点であり、彼らの終末史観と密接に結びついているとされている。第5章「考古学から見たクムラン遺跡」では、ドゥ・ヴォー説などをもとにクムラン宗団の居住期間の画期が検討され、宗団の人口と墓地についても触れられている。第6章「死海写本と旧約聖書の関係」では、200点のクムラン写本が旧約聖書の本文を伝えており、そこから旧約聖書本文の流動性が述べられる。また、申命記をはじめとするモーセ五書、詩篇、イザヤ書の写本の多さが、これらが新約聖書で頻繁に引用されていることと関連づけて述べられる。第7章「死海写本と新約聖書の関係」では、クムラン写本と新約聖書の双方に、初期ユダヤ教の黙示的終末論が確認され、両者の宗教的文化的な親近性が指摘される。直接的な関係は確認されないものの、エッセネ派と初期キリスト教とが歴史的に共通する点を持っていた点を看過すべきではないとされる。なお巻末に補遺として、「エッセネ派に関する古代資料」が附されている。

本書は、文章の平易さと高い専門性とを兼ね備えている。第3章以降は思想が扱われるため、些か内容的に読み応えがあるが、それだけの価値は十分に有していると思われる。ともあれ、我が国で唯一の真っ当な「死海写本本」を読まずに、ユダヤ・キリスト教の文化・歴史を語るのは問題があるのかもしれないと評者は愚考している。

（鷲田睦朗）

周藤芳幸・澤田典子著
『ギリシア遺跡事典』

東京堂出版、2004 年 9 月刊、A5 版、268 頁、
3200 円 + 税、ISBN4-490-10653-X

本書は著者 2 人によって選抜された 14 の遺跡を足がかりとして、最新の研究動向をふまえた古代ギリシア史の知見をえることができる格好の書物である。アテネ、デルフィ、オリュンピアといった代表的な遺跡が紹介されているほかに、マケドニアのヴェルギナ、ペラ、小アジアのペルガモンといった、これまであまり光をあてられてこなかった遺跡にもかなりの紙幅を裂いて論じられている。このことも、本書の大きな特徴となっている。

各章の配置は、ミノア文明からヘレニズム時代へとおおよそ時代の流れに即しているうえ、写真・地図ともにふんだんにちりばめられている。読者は第 1 章「失われた伝説の宮殿クノッソス」からはじめ、第 3 章「民主政治のふるさと　アテネ」、第 9 章「栄華を極めた古代マケドニアの都　ペラ」、そして最終章「ヘレニズム文化の粋を極めた城塞都市　ペルガモン」と読みすすめるにしたがい、現代のギリシア遺跡の旅を疑似体験しつつ、古代ギリシアの歴史・社会を学ぶことができる。

また、「はじめに」で澤田氏が述べているように、古代から現代へといたる「連続性」にも十分な配慮がなされており、遺跡を現代に息づくものとしてもとらえられる。随所におりまぜられたコラムも、ギリシアへの理解をより深めるうえ非常に有益である。

ギリシアに限らずその土地の景観といったものは 2 次元の書物や写真を介しては、いきいきとは実感できないものかもしれない。しかしながら本書は、まさにギリシアをめぐっているかのような感覚を味わうことのできる良書といえるであろう。また、さきだって出版された姉妹書、周藤芳幸編『世界歴史の旅　ギリシア』（山川出版社　2003 年）もあわせて参考にされることをおすすめしたい。

（中尾恭三）